

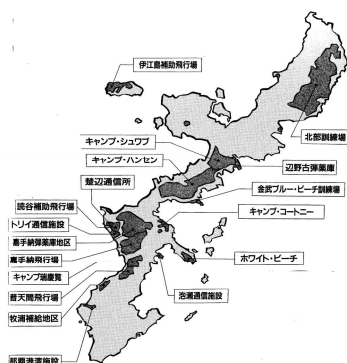
(マタイ 5:43～48)

挽地茂男

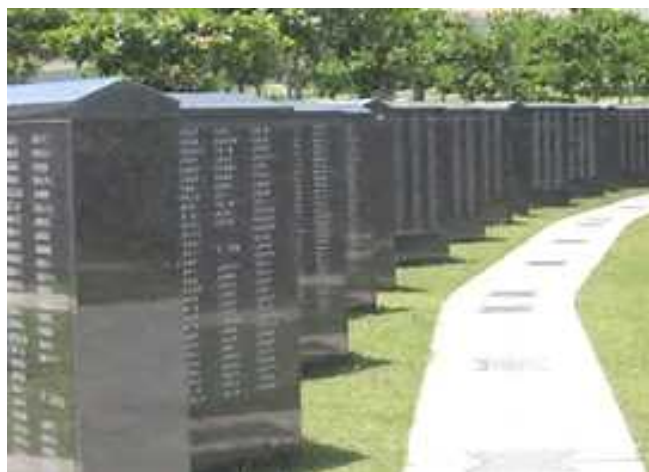
2020.6.21 日本基督教団千歳丘教会礼拝

明後日の6月23日は「沖縄慰霊の日」です。数年前に、これか

らの東北アジアの平和を考えるために、神学校で一月ほどの学びをしてから、神学生を連れて韓国と沖縄に



いったことがございます。それはどちらも現在のアメリカのアジア政策の拠点となっている所だからです。沖縄に、現在日本にある米軍基地の約 75 %が集中していることからわかります。米軍基地（嘉手納基地、移転予定地の辺野



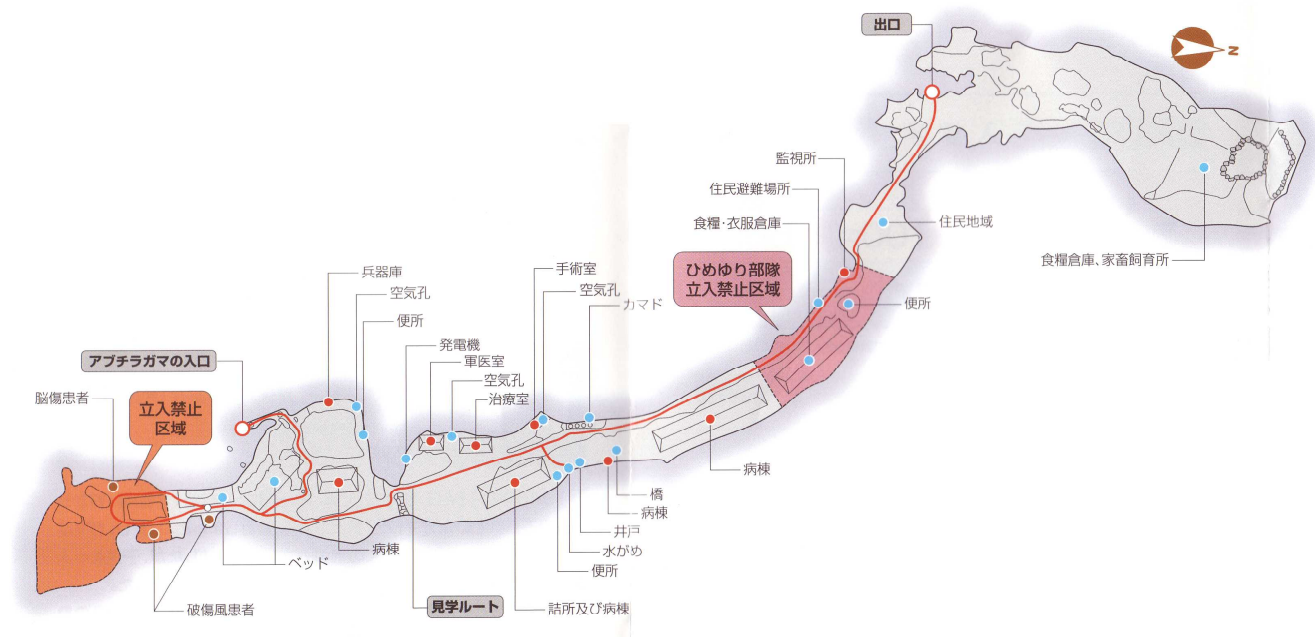
古)や辺野古で活動する平和団体。1987年(昭和62年)5月に全面返還された米軍牧港(まきみなと／まちなと)住宅地区の跡地を造成した那覇新都心とそこで活動する教会。沖縄平和祈念公園や祈念資料館、戦没者の慰霊のために造られた「平和の礎」(刻銘者数は2019年[令和1年]6月1日時点で24万1566人)——敵味方の区別なく戦没者が慰霊されている——や、日本兵や住民たちが隠れていた「ガマ」と呼ばれる自然洞窟や戦争の遺跡、戦跡を巡ったことがあります。

沖縄で最も印象に残ったのは、沖縄戦で最後の避難所となった「ガマ」(自然洞窟)でした。糸数(いとかず)にある「アブラチガマ」は全長270メートル。入り口から奥の方に足を進めると真っ暗で懐中電灯の灯りがなければ、隣にいる人さえ見えません。このガマに600人を超す負傷

兵を含む、日本兵と住民の雑居状態が約5ヶ月続き、ほとんどの人が戦火の犠牲となりました。ガイドさんの指示に従って懐中電灯を消すと、ほんとうに真っ暗です。ガマの暗さが重くなったような気がします。5分経っても何も見えません。ジッとしてみると、その暗闇が何か堅いもののように思えてきます。人々の呻きを閉じ込めた鋼鉄の壁のようです。そしてその暗黒が、時を経て過去の圧倒的な暴力について少しずつ証言し始めるような奇妙な気分になってきます。ガマを出るとき、出口近くで神学生が岩の間に偶然人の歯を見つけて、ガイドさんに聞くと、ガマの中からは今でもまだまだ人骨や歯が出てくると言います。沖縄が受けた戦争の傷跡は、まだ至る所に残

っていました。

沖縄戦は昭和20年3月26日の米軍の上陸に始まり、約3か月にわたって「鉄の暴風」と呼ばれる砲弾・砲火の嵐のような激しい戦闘が続きまし。昭和20年(1945年)6月23日に第32軍司令官牛島満大將(当時中將)をはじめとする司令部が自決した日をもって組織的戦闘が終結したとされています。この6月23日を、沖縄戦でなくなった人々の「慰霊の日」として、沖縄県が記念日に決めました。この沖縄の戦闘で亡くなった方々は、一般住民約15万人と日本兵を含めて約23数万人といわれています。昭和15年(1940年)の国勢調査では沖縄県の人口は約57万5千人でした。つまり、当



時の沖縄県民の内、2.5割近い人（4人に1人）が亡くなったことになります。

聖書は福音のことを「和解の福音」「平和の福音」と呼ぶことがあります。また「平和の福音を知らせる者の足は美しい」とも語ります。「山上の説教」の中で主イエスは「**平和を実現する人々（新改訳「つくる者」）は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる**」と語られました。その主イエスは、また「汝の敵を愛せよ」とも言われたのでした。新型コロナウイルスの感染問題が深刻になる前は礼拝でマタイ福音書の「山上の説教」を読んでおりました。そのマタイ福音書には今の状況が少し落ち着いてから——おそらく9月くらいから——戻りたいと思っています。大切な箇所ですので、短縮せずに読みたいと思います。今日読みますのは、その山上の説教の一部、「汝の敵を愛せよ」という言葉が出てくる部分(5:43-48)です。

「汝の敵を愛せよ」という主イエスの教えは、言葉として素晴らしいけれど、非現実的だと思う人は少なくありません。現実には自国の国益が冒されれば、キリスト教国であったとしても、アメリカ

のように、湾岸戦争だ、ビン・ラディン暗殺だ、と報復に出るのが当然ではないか。「汝の敵を愛せよ」「右の頬を打たれたら左の頬も出せ」などとは言っておられないだろう。イエスの言葉はあまりにも理想主義的で、非現実的だと思えてくるのです。しかし主イエスの言葉が非現実的にしか見えないのは、マタイの読者が置かれている状況、同時に、わたしたちが置かれている状況に対する認識が近視眼的だからです。近いところしか見えないからです。

初代のキリスト教徒は、主イエスの到来によって「すでに」救いが始まっている現在と、「いまだ」その救いの完成を待つ来たるべき未来(の終末)との間、つまり「すでに」と「いまだ」の「時の間」に生きていました。わたしたちもそうです。未来を見据えながら現在を生きる人間です。

ここで少し時間とか状況ということについて考えたいと思います。内田樹が『サル化する世界』という本を書いています。内田は「今さ



えよければ、それでいい」「自分さえよければ、それでいい」という利己的で近視眼的なものの見方をする人々が増殖する社会を“サル化”した社会と定義します。内田樹はこれによって、世界の指導者をはじめ人々の、世界的なモラルハザード、倫理の欠如や倫理観や道徳的節度の欠落を指摘します。

「サル化」という発想(言葉)は「朝三暮四」という中国の故事から



採られています。宋の国に狙公という猿好きの老人がいました。サルが増えて

家計が苦しくなったため、飼っている猿に与える餌を減らそうと考えます。そこでこれまで猿にやっていた1日8つの柝の実(どんぐり)を7つに減らすことにします。狙公は猿たちに、今までは「朝に4つ、夕方に4つ」柝の実を与えていたが、「これからは朝に3つ、夕方に4つにする」と言うと猿は怒り出します。そこで「じゃあ、朝に4つ、夕方に3つではどうだ？」と言うと、猿たちは狂喜して承知したという故事です。〔元

来人心掌握術を教える、政治的故事と言われる。〕朝から夕方までを全体として考えることが出来れば、全体の数は変わらないのに、目先の数に満足すると、後のことを考えられなくなってしまう未成熟な時間意識を取り出します。

今の日本では、政治家も官僚もビジネスマンもメディアも、論理的にものを考える力そのものが急速に衰えています。長いそして広々とした歴史的スパンの中で「今」を見るという習慣がなくなっているのです。時間の〈つながり〉が意識できないので時間意識が縮小し減退して、時間意識が全く未成熟のまま、「今さえよければ、それでいい」、また社会との〈つながり〉が意識できないので「自分さえよければ、それでいい」という利己的で近視眼的なものの見方をする若者が増殖していると言うのです。

時間意識とは、もう過ぎ去った「過去」とまだ到来していない「未来」の間に自分を位置づけるということです。聖書的に言えば、「創造主による創造」という遠い過去と、「メシアによる救済」という遠い未来(終末)の間に置かれてい

る今の自分を引き受けるということです。新約聖書的に言えば——先ほど申しましたように——主イエスの到来によって「すでに」救いの始まった現在と、「いまだ」その救いの完成を待ち望む来たるべき未来との間にいる自分を引き受けるということです。その時に始めて、刹那的な価値ではなく、永遠的な価値を選択する価値選択が行えるのです。「汝の敵を愛せよ」という言葉が、きれい事ではなく、現実的な価値として意識されてくるのです。「相手をぶちのめせばそれで終わり」ではないのです。キリスト教信仰は「広々とした時間意識」を要求します。創造主の支配する過去と未来の中間時に置かれている今の自分を把握できた者だけが、そして自分の１００年に満たない生涯が神の栄光を現すべく神によって「今、ここに」置かれているということを把握できた者だけが、永遠的な価値を選択することが出来るのです。そこから真の知性と倫理性が発動するのです。「汝の敵を愛せよ」という主イエスの言葉は、その時間意識の中に生きているのです。

本日の聖書箇所で、主イエスは

まず律法の規定を〈**再確認**〉します。４３節。「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。」レビ記１９章１８節の規定です。隣人愛を命じていますが、この文脈では、その「隣人」が仲間のイスラエル人だけを含むことは明らかです(19:15, 17)。「隣人」ではないイスラエル人以外の人間は「敵」として「憎しみ」の対象となり得るのです。

続けて主イエスは、４４節、「しかし、わたしは言っておく」とことわりを入れて、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」と続けます。律法規定を〈**根本(根源)的に再解釈**〉しているのです。主イエスは律法をその根本の〈愛〉からとらえ直します。「神への愛」と「人への愛」から人を見る限り、すべての人は、



神が創られた愛すべき人たちののです。「敵」であろうが、「自分を憎む人」であろうがそうなのです。

「広々とした時間意識」に立つとき、神と人に対する愛は、究極的には、敵をさえも愛するという行動を導き出すのです。

次に、主イエスは「敵を愛する」理由と〈**具体的な行動**〉について語ります。それは45－48節。「5:45 あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。5:46 自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるろうか。徴税人でも、同じことをしているではないか。5:47 自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるろうか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。5:48 だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」

キリスト者は「すでに」と「いまだ」の「時の間」に生きています。「広々とした時間意識」を保ちつつ、父なる神の平等な愛が実践目

標になります。この愛は、父なる神の性質に基礎づけられています。また父の完全性が目指されます。完全とは献身において一心でひたむきであることを意味します。

マーチン・ルーサー・キング牧師は、皆さんもご存知のように黒人差別に反対する「公民権運動」と呼ばれる運動を指導して、黒人差別と闘った人物です。白人から加えられる、黒人への差別、誹謗、暴力に立ち向かいながら語られた彼の説教「汝の敵を愛せよ」という説教はとても感動的です。その中でキング牧師は「われわれが自分の敵を愛すべき理由」を四つ上げています。つまり第1に、憎しみは憎しみを駆逐できない、ということ。むしろ憎しみは憎しみを生み出すこと。第2に、憎しみが魂に傷跡を残し、人格をゆがめるから、ということ。それは相手ではなく、憎しみを抱く人の中に



傷を残し、その人の人柄をゆがめていく、ということです。第3に、愛は敵を友に変えることのできる唯一の力だということ。「暗闇は暗闇によって追い払うことができず、暗闇は光によってのみ追い払うことができる」からです。愛によって憎しみに勝ったとき、そのときにはじめて勝利したと言えるのです。第4に、天におられる父なる神の子供と呼ばれるために、汝の敵を愛せよ、と語っています。そしてキング牧師はこれに加えて、この「汝の敵を愛せよ」という説教の中でこう言います。「『汝の敵を愛せよ』とイエスがいい給うた時……『汝の敵を好きになれ』といい給わなかったのは、われわれの幸いとするところであろう」

（『汝の敵を愛せよ』P.71-72）と語ります。黒人をアフリカの原野から獣を捕獲するように捕まえて、奴隷市場で売りさばき、過酷な労働に酷使し虐げ続け、自分たちの生命を脅かし、自分たちの子供を家畜動物のように扱う人たちを、すぐに好きになれるでしょうか。しかし愛することは、たとえ相手がそのようであってもキリストを信じる者の基本的なたたずま

いなのだということです。天から降る雨は彼らをも潤すのだからです。

わたしたちの愛もまた、天からふる雨のようでありたいと思います。神の恵みを証しすることができますように。またいつも言いますように、山上の説教の中心が「主の祈り」であることを覚えつつ、祈り深く、新しい1週間の歩みを始めたいと思います。祈りましょう。

2020.6.21 日本基督教団千歳丘教会礼拝

